

しんくり（真繆）の考察 侘助論

しんくりとは何のことか

しんくりという言葉は「椿花図譜」に描かれた花の名前にあります。第 202 図と第 956 図にくずし字で書かれています。翻刻され復刻版が出されていますが、復刻版の編集者はこれを、しんさんと読んで真繆の表記で翻刻しています。私はこれを他の資料にもある「シンクリ」のことだろうと考えました。この字繆を調べてみると、知られた訓はありませんし、旗足または生糸の意味ですからどうも意味もつかめません。そこで、私はこの漢字についてくりと読むのだから、くりと読む字でなければならないと思いました。即ち繆^{びゅう}です。繆^{びゅう}と訓読みできるからです。つまり、シンクリはしんくりのことではないかと考えたのです。（安藤芳頭氏はこの文字 繆^{びゅう} のままで、しんくりと読んでいます。）

真は心つまり花心のことです。くりは、他の資料でも幾つかの文字があてられています。「剪花翁伝」で中山雄平氏はしんぐりと発音してしんえぐり（心鑿）であろうとしています。私は他の研究者とは違って心を削りぬいたようだというのではないと思いました。椿の花の心（雄蕊や雌蕊）を紐でくくったように、なぞらえての命名ということになります。繆は繊維の原料である麻を束ねたものの個数にも用いられた言葉です。

椿花図譜の真繆の絵を見ればわかるように雄蕊に花粉がありません。つまり雄性不稔蕊の花として描かれています。真繆の品種、シベナツツバキ（資勝卿記）も躑躅椿（百椿集）なども同じ椿であろうと推定しています。古くから知られている品種であることからこの品種、真繆は今日の小蝶侘助（＝胡蝶侘助）のことではないかと考えました。小蝶侘助はしばしば花粉のない花で咲くからです。（この図譜の花はモザイク病に侵されていないので、星もありません。）椿花図譜には侘助の名前はありません。江戸時代の初めころのつばきの園芸品種名は統一されていたわけではなく、今日言われているものとは違うものが多く記述や図譜などから推定されるものです。花粉の出る花は別の名前、つまり「雪紅」第 30 図などと呼ばれていたことから別の品種とされていたのでしょう。両方の花が咲混じることが理解され、やがてこの品種について侘助の名前が残ったものだと想像しています。（ある研究者はこの意見に対してこの椿花図譜の花はワビ芯椿（後述）であるとしています。）真繆について考えることは侘助について考える事になります。

この有名な椿品種、侘助の名前は「花壇地錦抄」にあり、一名「こてう」とあります。雄性不稔蕊を持つ花つまり真繆^{しんくり}の花も侘助のような花も集合名詞のように使われるようになり、それぞれを区別するために、別名同士を繋ぎ合わせて小蝶侘助と呼ぶようになったのでしょう。〇〇侘助と呼ぶもとなったのがこの品種なのです。そもそもの侘助（＝小蝶侘助）は蕊について、「なるほど尋常」（百花椿名よせ色付）とこの名前を始めて記述した伊藤伊兵衛氏は説明しています。この小蝶侘助を描いたほかの資料の絵でも花粉が黄色く描かれていて、花粉を出す姿で描かれています。（梅園海石榴花譜など）しばしば花粉を持たない花（真繆）を付けますが、園芸品種としては花粉のある花が本来の侘助の咲き方とみなされていた事がわかります。伊藤氏はこのように咲く花を「しおらしくてすぐれて

きれい」と言っています。従って、侘助の別名である「こてう」も花粉のある花であったことになります。

小さな蝶々

こてうを胡蝶と書く研究者が多くあります。私はこれを誤字であると考えています。幕府の編纂した「古今要覧稿」でも「椿伊呂波名寄色附」、「椿花集」でも昭和の「新撰椿花集」でも小蝶侘助となっています。明治期に蘭のファレノプシスが導入されて、胡蝶蘭という言葉が知られるようになってからこの胡蝶と間違われたのだと思います。ちなみに、胡蝶花はアヤメ属の植物しゃが（*Iris japonica*）のことです。この草花に似ている蘭という意味の命名だと思えます。胡蝶は漢語ですが、小蝶は漢語ではなく、日本で作られた言葉と考えられます。

地錦抄ではこてう天字と旧かな使いで書かれています。胡は仮名文字としても使われる文字で「こ」と読むことは承知しています。ですから文字使いとしては小蝶にプライオリティがあります。こちょうは侘助が小さな花なので小さな蝶々という意味であると思えます。

胡はいろいろな言葉に使われ、なぜこの字が使われるのか意味がよくわからない場合もあます。分かり易い例を示します。湖という文字をみればわかります、胡は巨の書き換えです。胡な水つまりおほき巨な水という意味ですから、湖はみずうみと訓めるわけです。難読漢字も意味が分かります。胡蜂、胡獺の意味が理解できます。胡蜂は巨な蜂はちですから、スズメバチとよみます。獺はかわうそのことですから、胡獺はトドと読むわけです。つまり、胡蝶は巨蝶の意味とするのが妥当ですから、本来は大形の蝶々のことになります。小蝶とは正反対の意味です。この古い江戸椿の名前は小蝶侘助と書く方が良いと思えます。

ワビ芯とは何か

さて、ある椿の協会では、新しく発表された真繻品種について、ワビ芯ツバキ（侘芯椿）と呼び、これを葯の退化した山椿（やぶつばき）系の品種であるとしていて、古くからの侘助類系品種と別のグループとする考えを採用しています。ワビスケ系品種群についても植物学的に均一でない可能性があることを以前示しましたが、私はこの大別すること、大別の基準についても異論があります。

まず、第一に申し上げたいのは「ワビ芯」という言葉自体のことです。この考えを強く推し進めてきた研究者はつばきの筒蕊を雄芯筒と呼んでいます。おしべ、めしべを雄芯、雌芯と書いています。また、蕊という字にしんとふりがながふってある本も書いています。つまり蕊という字の略字かもしくは新字体が芯であると思込んでいるのでしょうか？ 実際にある研究者が蕊をしんと読むのを聞いています。（この時私は蕊はしんとは読みません、中国語でも「ろい」のように発音しますよと指摘しましたが、何も言わずに行ってしまうられました。）つまり、略字ともとの字は音も訓読みも同じはずです、芯が蕊の略字であると言う研究者があります。そういう方々は、雄芯、雌芯をゆうずい、しずいと読んでいる訳ですが、ワビ芯を用いる方は雄蕊ゆうずい、雌蕊しずいをゆうしん、ししんと読んでいることは明らかです。

芯は蕊の略字でも新字でもありません、蕊はしべ、ずいです、しんとは読みません。雄蕊、雌蕊は訓読みしようとしても、おしん、めしんとは読めません。芯はしんとは読めないので、研究者によりますが、一般的に誤字と誤読と誤解があると思います。つまり、文字使いとしても侘蕊は侘蕊の間違いです。植物学的にも花にあるのは蕊で芯ではありません。

芯は藺草、心の草

芯は燈心草のことで、藺草^{いぐさ}の別名です。草という文字を考えてください。(成長の)早い植物の意味です。蒲^{がま}もそうです、浦(水辺)に生える植物の意味ですから、ガマの意味になります。植物を意味する草冠は下の字に修飾されます。芯という字でも艸は心を修飾しませんから、草の心(植物の茎の髄や生長点など)の意味ではありません。芯は「心の植物」の意味ですから、心に用いる艸の意味になるので燈心草のことです。藺草を蠟燭^{ろうそく}の心^{しん}、つまり、灯心に用いたためです。燈心草科^{とうしんぐさ}という分類学用語もありました。植物を取り扱う者はこの字の本来の意味を知らなければなりません。そうすれば花に花心^{しん}はありますが、芯^{いぐさ}はないことがお分かりいただけるでしょう。つまり、心のかわりに芯の字を使う濫用は避けるべきです、意味が違う文字だからです。空芯菜や芯腐れ病、摘芯などは植物学的にもあり得ません。藺草にオスもメスもありませんから、雄蕊^{ゆうしん}、雌蕊^{ししん}という言葉もあり得ないと思います。雄蕊、雌蕊という言葉を使わなければならないと思います。(雄心は雄々しき心の意味で雄蕊の意味はありません。摘蕊^{てきしん}と誤解すると、人工交配の時に雄蕊を摘むことの意味に取れます。)

園芸文化的な侘助と植物学的な侘助

さらに、侘助(小蝶侘助)は園芸文化的には花粉を持って尋常に咲くものですから、真繆^{しんくり}(雄性不稔)である必要はないことです。小蝶侘助の壮齡樹は花粉を持って咲くのが普通です。小蝶侘助は全ての江戸時代の図譜で黄色く花粉を持つ姿で描かれています。これに倣って紺侘助や黒侘助も花粉を出す品種です。侘助と名前がついていない椿、太郎冠者も花粉を出すのが普通です。(しゃんとしてしべよく-百花椿名よせ色付)花粉を持つ西王母も侘助類とするのは園芸文化的なものではなく、植物学的な立場によるからです。同じように子房に毛があるので微笑などもワビスケ類と考えられる椿で、花粉がある椿です。このように植物学的な意味でも園芸学的な意味でも花粉を出さない蕊だけが侘助蕊であるとするには無理があります。

植物学的には牧野富太郎氏が指摘しているように、侘助椿類は子房の表面に毛が生えていて植物分類学的な点で明らかに日本の野生植物、山椿にはない性質を持つということが最も重要な区別点だからです。この点で牧野氏に従えば、子房有毛の唐椿の関与(交雑)が考えられます。子房表面に毛がある数種類の園芸品種(後に侘助系椿と呼ぶことがある)を唐椿(レティキュラータ)の変種や品種として記載されているからです。また、ロバートシーリー氏の指摘に従えば別種のピタルツバキの交雑種が太郎冠者(Sukiya)や数寄屋(Hatsukari)ではないかという推測が得られます。(この他にもサルウィンツバ

キや茶の木などの関与を想定している研究者もあります。) このことから子房に毛が生えていることが植物学的な侘助類の最も必要な要素であるのです。花が大きいとか小さいとかは関係がありません。また、花粉のない真繆で咲くことは特に別種や変種に分類するような重要な形態的な特徴ではないと言えます。不稔は一般的には交雑などによる障害で、雑種の植物にはしばしば現れるものですし、また、雑種と考えられない場合でも不稔は動物の不妊に当たる言葉ですから病気や障害です。病気を植物学的な分類に用いる訳がありません。植物学的な侘助も園芸的な侘助も基本的に雄性不稔(真繆)と切り離して考えるべきものです。

小黑侘助のこと

以前、協会から要請があり、私の作出花数品種をジャパソカメラリアに紹介してくれたことがありました。この時、小黑侘助も挙げたのですがこの品種は花粉は多くはないですが、花粉を持つ品種です。戦後の椿ブームの中でつばきに魅了された私たち椿愛好家の共通の師であった中村恒夫氏は「茶花的に切り花として使われる小輪の花を侘助と名付ける傾向もある」(新花卉第 99 号) ことを早くから認めています。もともと花粉がある花を侘助としていたのですから何の不思議もないと考えています。この品種は侘助のように猪口咲きの小さな花ですからこの名前を付けました、変えるつもりはありませんと言いました。はたして、この品種名が悪いとして、この品種についての報告部分だけがボツになりました。

ワビスケでもないものに侘助という名前を付けるのは良くないと言われ、小黑椿と変えてはどうかと編集関係の理事さんに言われました。この花は形態的には雄性不稔ではなく子房に毛が生えるようなこともない品種です。

侘助ではないものの蕊しべをワビ芯と認定するのは良いのに、園芸家などが侘助に似ていると見て侘助と呼んだり、〇〇侘助という名前を付けるのは悪いことであるからやめなさいと言われるのはつじつまが合いません。納得がいかないことです。私は小黑侘助が植物学的なワビスケツバキであると主張している訳ではありません。侘助は人名のようです。人の名前を植物の園芸品種名に与えたわけです。一般的にも園芸的な品種名を似たような品種に付加して与えてきたのは伝統的な命名法です。

さて、かつて日本ツバキ協会が育種研究部会を指導されていた、長浜昇氏は交雑種とは考えられないと判断して、山椿に現れる雄性不稔椿は内婚による劣性遺伝によってできたものではないかと言っていました。(近親交配、遺伝的な病気) この考えに反対し、侘助と関係があると考えるのであればまだしも、ワビスケと関係がないとする雄性不稔の蕊がなぜワビスケ蕊なのでしょう。植物学的に侘助椿類とされる椿の蕊が「ワビ芯」ではないというのも理解出来ません。やまつばき系のつばきの蕊はやまつばきしべでしょう。ヤブツバキの芯ならヤブ芯です。そのヤブ芯が退化したのがワビ芯だというのは、どういう意味でしょうか? 植物学的な「侘助」の花しべが侘蕊ではないとすれば、ワビ芯でないワビスケ系品種があります。花粉を持つ侘助類の花しべはなんと云えば良いのでしょうか? 太郎冠者はヤブ芯のワビスケツバキと呼ぶことになりますか?

ヤブツバキが雄蕊を退化させたのがワビ芯ツバキということなら、退化しているから種が変わるという意味にも取れます。ヤマツバキがそのまま蕊だけが別の種のワビスケツバキに変化しているということになります。太郎冠者がピターディの血を引いているとしたら、半分しかピターディの血を引いていないことになります。他のワビスケ系品種は太郎冠者の子供もあるとすれば、それらはさらにその半分しか有毛種の血をひいていない椿です。むしろワビスケ系とされる椿はヤマツバキの血の方が多くことになります。

論理的にはワビ芯ツバキの蕊が正常になったものがヤブツバキなのですから、正常花の天倫寺月光は「ヤブ芯に進化したワビ芯ツバキ」ということですか？また、植物学的には花粉を持って咲く時の小蝶侘助はヤブ芯に進化して咲くワビスケツバキであるということになりますか？

初めの侘助（小蝶侘助）が尋常に咲く花であるとされていること、実際に花粉を持つ花をよく咲かせることや、江戸時代の図譜に花粉を持って描かれているのを全く無視して侘助の雄蕊（ワビ芯）は花粉を持たないものだと思いつける園芸的な考え方を支持する方はなぜそうなるのか詳しく教えてください。また、植物学的なワビスケツバキ類が雄性不稔性である必要があると考える方があれば、なぜそうなるのかを教えてくださいませんか。

学名の端折りと「ユキ芯」のこと

またある研究者はゆきしんという言葉も使っています。雪椿（ユキツバキ）の蕊のことです。ユキツバキしべを縮めてユキ芯と言っています。これも雪蕊というつもりである訳ですから音読みして「ゆきずい」と言っているつもりであるわけです。この蕊（本当はずい）という字の略字として芯（本当はしべとは訓しない）を音読みして「ユキ芯」としているからです。しべには他にも字体があります。古文書（白薬一椿花集）などでは薬の字が使われています。また園芸の辞典には蕊も使われていますがこれらの文字もしんとよんでいる研究者が少なからずあると考えられます。

植木屋さんが、白侘とか紅侘とか言うのは口語で端折って言っているだけです。雪だ藪だと椿園芸愛好家が言いますが雪椿であり藪椿（山椿）のことです。ましてカタカナで表記すれば植物学的な言葉としての意味合いが強く感じられるでしょう。私はカタカナで表記する学名を半分に切るのも良いことではないと思います。

先に示した「百花椿名よせ色付」では、この様なツバキの蕊を「さざんかしべ」と呼んでいます。散開する蕊を筒蕊と区別するとき最もたとえ安い蕊が山茶花のそれだったからです。後年この山茶花蕊椿は別の椿、雪椿と呼ばれるようになりました。雪椿の蕊は園芸文化的にはさざんかしべということとはできます。しかし、雪椿という言葉が出来ている現在では今更山茶花に例える必要がないとすれば、雪椿の蕊は当然雪椿蕊です。研究者に倣って言えば、（正しい文字使いで書いて、正しく音読すれば）「ユキ芯」は「ユキ蕊」となります。しかし、つつしべ、わりしべなどと同じように、椿園芸の伝統を重視して、音読みしないで端折らずに、ゆきつばきしべ（雪椿蕊）と言うべきだと思います。

カタカナ表記

さて、植物の名前などをカタカナで表記する場合があります。場合によっては園芸品種名までカタカナで書かれる事もあります、このことについて元文部科学省の教科書検定官を務めたことのある金子明石氏に尋ねたことがあります。ご自身も植物の熱心な愛好家でした。私が現在代表を務めている、日本アイリス・ヘメロカリス協会の先の会長さんでした。私とは若いころからの数十年にわたる交流がある方です。私の論文なども指導してもらったこともあります。金子氏によるとなんの通達や指導もないことだと言われました。植物名などは難しい漢字のものも多くあります。教育漢字に無いような文字も多く使われています。また、漢字表記がない外国語の植物に漢字の和名を付けることもなくなって、カタカナで書かれる植物名なども多くなりました。そうするとひらがなで表記されていたものまでがカタカナで書かれるようになってしまった、ということであると理解しました。私の立場では園芸文化的なことがらを重視しようという思いから、漢字表記を使っています。意味の違いはありません。

ちなみに、私たち東京の植木屋さんは山椿という言葉を使っています。一重咲の小輪花を俗に山侘などという方もありました。百椿集^{ひゃくちゆんしゅう}で安楽庵策伝和尚は「山椿」を用いています。世界初といわれる椿の園芸書での呼び方が今日まで伝えられ使われ続けています。だれも彼もヤブツバキばかりで、やまつばきと呼ぶ人がありません。何故か急に山椿を使う人が無くなりました。山椿を死語にしてはならないと思っています。「ただの植木屋言葉」のように思いませんか。山椿は園芸愛好家にとっては400年も続く椿園芸の伝統的な言葉なのですから。

雄蕊筒（雄蕊筒）のこと

さて、つばきは単体雄蕊を持つ植物とされています。私が自分の子供に与えた学研の「原色学習ワイド図鑑 樹木・果実」でもヤブツバキは「おしべは多数で単体」とされています。牧野富太郎氏の「園芸学雑誌」（1910）の白侘助の雄蕊について「monadelphous stamens」と記述して、単体の雄蕊の集合としています。石井勇義氏は園芸大辞典で「つばき」の「雄蕊は多数、花糸は下部融合して筒状をなす」と述べています。

雄蕊筒^{ゆうしんとう}という言葉を用いてつばきの雄蕊を説明する研究者があることを言いました。（雄蕊頭としているのも見ました。この表記はゆうしんとうと読んでの誤変換でしょう。）蕊は述べているように蕊の誤字、誤読ですから、雄蕊筒と書く専門家もいます。私はこの言葉はつばきの雄蕊群^{ゆうざいくん}を説明するのには適当ではないと言ってきました。

古くから筒蕊という園芸的な言葉はあります。伊藤伊兵衛の「百花椿名よせ色付」の冒頭で図^{はなのしべのず}を示して、山椿形のしべを「如此（このごとく）なるをつつしべともちやせんしべともいう」と解説しています。

茶筌蕊^{たて}を竪^{たて}に切つて見るとこの雄蕊がどういふものかわかります。雄蕊群の束状の花糸の最も外側のものが中ほどで互いに合着しています。花糸の合着部分の、雄蕊の根元に近い部分は結果的に短い管状になります。さらに、その下部の外側の筒状の花糸団は大きく

花卉とくっ付いています。花卉と離れて内側に行くにつれてそれぞれの花糸同士の合着部分は少なくなり、雌蕊の近くなるほど互いに離れています。最内部の幾つもの雄蕊はどこも他の雄蕊とも花卉とも合着しておらず完全に単体です。

一方、雄蕊筒（staminal tube）は落葉樹の柃木の花にある器官でつばきのような雄蕊の基部が合着しているという様なものではありません。（DICTIONARY OF GARDENING - THE ROYAL HORTICULTURAL SOCIETY）雄蕊が一つの円筒形をしている器官です。単体の雄蕊は全くありません。柃木の筒蕊と雄蕊筒は同じ構造のものではないと思います。柃木園芸の用語（筒蕊）とこの植物学用語は区別して用いるべきです。（柃木の花に筒蕊はありません。staminal tube を筒蕊と勘違いしてはいけないと思います。筒蕊は英文で言うならば、filaments-tube（花糸筒）とでもしないと誤解を招きます。）

真繆の具体的な意味

さて、「シンクリ」について真梨とも書かれたものをみたことがあります。これが私の考えるように真繆であると考え、さらに面白いことが理解できます。私は当初から心を刃物などで削り抜いたようだ（心削）とは考えませんでした。糸偏の文字が使われているのですから糸でくり切ったようだという意味に捉えていました。しかし思い違いをしていたと気が付きました。切り取られてはいないのです。

私が柃木図譜の真繆が小蝶侘助ではないかと考えた一つの理由はこの絵にはっきりと雌蕊が描かれているからです。雄蕊群から花柱だけがピョンと飛び出しています。この特徴が小蝶侘助の雌蕊の姿にそっくりだからです。つまり、もしも花しべを繆り、切り取ってしまったら雌蕊の先つまり、花柱のその先もなくなってしまいます。花柱は花糸と同じ長さになっているはずですし、雄蕊の先が短く小さくても、きりとられたようにプツンと無いわけではありません。「しんぐりつばきの最上たり」（しんぐりは集合名詞）と中山氏が言っている、白侘助の花も白い小さな葯部をもって咲く花です。

想像してみてください、つばきの花蕊（花糸団）を糸でしばってみましょう。そうするとそれよりも先には栄養がいきません。雄蕊の先は縮こまったようにしか育たないでしょう。めしべの先は縛られた時のままになります。つまり、咲いている花の花心を削り抜いたり、切り取ったようであると言っているのではないのだということです。

葯の形成

柃木の蕾を剥いて観察してみました。そうすると正常に花粉を持って咲く花はまだ全く色も見えない蕾のうちからすでに雄蕊はほぼ完成していて、黄色く花粉嚢は染まっています。花が開く 1 か月ぐらいまえからすでに花粉が完成している場合もあります。一方、真繆で咲く柃木は全く黄色い部分（花粉）がありません。つばきの雄蕊群の成長の具合を一本一本の雄蕊の成長に従って説明しましょう。はじめに花芽が分化してきて、生長点の外側から内側へ中心にむかって苞 萼 花卉 雄蕊 雌蕊の順に形成されます。おしべはじめ小さな棒状にできてきます。やがて棒状のおしべの先端の部分が葯になるわけです。花糸の先端部は支持部に一對の葯ができてきます。蕾が開く前に葯は十分発達し花粉袋の中は花粉で満たされて、花糸と葯の接続部分は細くくびれて、開花を待つのです。

2023年7月27日のメモがあります。白玉椿の蕾は10mmの長さのものでまだ雄蕊は先の部分が少し太った白い棍棒状でした。紅侘助は12mmの長さの蕾でやり状に尖っています。窓の月（加茂本阿弥？）は11mmの蕾ですが、笠の開いていないきのこのように葯部が少し膨らんで葯部と花糸との間に筋があり、分化がはじまっています。まだ花粉嚢のような形のものが見えません。天倫寺月光は12mmの蕾ですが、明らかに分化は進んでいて、葯部は支持部と花粉嚢らしきものができていました。しかし花糸と同色で白っぽいものです。曙は15mm長の蕾でもっとも生育していました。花粉嚢は透き通っていて支持部は白く濁ってさらに分化がすすんでいましたが花糸と葯部の間はくびれていません。黄色く花粉の元が色づくまではまだ時間がかかりそうでした。西王母は11mmの蕾で紅侘助より少し成長していましたが先の部分が少し膨らんで槍型でした。いずれも花糸団を含めてもまだ高さ1mm前後で、剣山のように雌蕊を取り囲むように列をなして雄蕊は立っています。

この時期、つまり、花芽の分化が始まってしばらくは、後に真繆となる品種も尋常に咲く事になる品種も全く変わらないことが観察されました。

次にもう少し育った蕾で見えます。すると劇的に違ってきます。それぞれの品種は花の大きさや花の咲く時期が違います。また、花が咲く時期も品種によって揃っていませんから、蕾の大きさを目安にして、雄蕊の状態を対比して見てみるようになります。すると2cm以下の蕾ですでにしっかりと花糸と葯が完成していて花粉袋の中は黄色くなっているものがあります。椿の花は急激に花蕊を完成させていくようです。一方で、真繆で咲く花はほぼ7月当時とおしべの完成度は変わりません。もちろん花弁もめしべも蕾の肥大に連れて大きくなっていて、花糸の長さは相対的には伸びていても葯の分化発達、完成度は進んでいません。

短糸形と長糸形

先程、花心を糸でくくったようにと言いましたが、心が繆られたのは私たちが想像するよりずっと早い時期であることがわかります。真繆で開花する花の雄蕊の成長が止まったようになるのは、長さが1cmあまりの蕾の時であることが推定できます。

紅侘助などの様なものは花弁に対して花糸の発達が悪く、雄蕊群の短いものを短糸形（短蕊形）、ある程度発達して花糸が長く伸びているものを長糸形（長蕊形、筒蕊形）と便宜的に呼んでみたいと思います。白侘助や太郎冠者、吉備などはやや長く、筒蕊をそのまま小さくしたような形をしています。天倫寺月光などもこの様なタイプと考えます。花糸が長く伸びるので、これを長蕊形としてみます。一方雄蕊がごく短く小さいものは、桃色侘助（牧野）などのように雄蕊がないようにみえます。このように真繆の度合の状態は品種によって一様ではないわけです。同様に同一品種でも変化があり、何らかの病理的理由で咲きかたは変わる場合も珍しくありません。小蝶侘助が最も真繆状態の変化がおおきく蕊無状態で咲く時は早い時期に雄蕊の成長が止まったということです。花糸団の筒を伸ばして花粉を持って咲く時は雄蕊の成長がそれほど阻害されなかったことになるのです。（筒蕊形）白侘助は秋に咲く花はかなり長い筒蕊形になり、遅くなって春に咲く花の花糸はかなり短い短蕊形になります。太郎冠者や吉備、天倫寺月光などは短糸形に咲くのを見ている

せん。そのかわり吉備はまれですが、完全に真繻にならずに多少花粉を持ってさくことがあります。韋駄天や瀬野川は長糸形の最たる例で葯の形は定形で花粉だけがありません。真繻の程度によって花の様子が変わるのです。雄蕊の伸長発達が早くから止まってしまうのが短糸形と考えます。バランス的に十分花糸が伸びるのが長糸形でこの時は葯の完成度も高くなるということです。一つの品種でも変化するし、もちろん花糸の長さは中間的なものもありますが、山椿系と研究者の言われる品種には長糸形が多いのですが、子房外面に毛のあるものには長糸形が少ないようです。山椿系とされる品種でも短糸形の花の品種もないわけではないこともわかりました、また、普段短糸形であるものも長糸で咲くことが無いわけではなさそうです。なぜこのような偏りが起こるのかわからないことばかりです。

雄蕊のキメラ性変異

さて、太郎冠者などの雄蕊について知られていることは葯が特異な形状をしていることです。葯部の花粉嚢が変形していて凸凹なのです。これについて上記の様な雄蕊の成長の観察からこれは一種の絞り状態であると考えました。ひとつの雄蕊が縦絞りのように真繻と尋常がキメラのように見ると見るわけです。雄蕊の未発達状態が絞りのように不揃いになるために葯部自体も不定形になり、花粉嚢が途切れ途切れになるのです。従ってそれぞれの雄蕊ごとに大きさや形が変わるような変形が起きるのです。絞り椿の花のように時には紅勝ちになったり白勝ちになったり変化するのと同じように、全体的に真繻となるときと半々ぐらいのときと正常に近い花で咲く場合があるわけです。絞りは小絞りもあれば大きく色分けするように絞る縦絞りもあるように品種によって花によって絞り方はまちまちです。同様に真繻状態もいろいろです。太郎冠者が小絞りなら小蝶侘助は縦絞りぐらいのキメラ状の場合もあります。尋常花に咲くばかりでなく、時には短蕊形になり。しばしば、ピョンピョンと長く伸びて花粉を持った雄蕊が真繻の短蕊の中に混ざることもあります。天倫寺月光はダイナミックに大きく絞るようだと言えます。正常花をしばしば、咲かせるからです。時には雄蕊群の半分だけが真繻状態であったり、一部分の雄蕊の葯が太郎冠者や小蝶侘助のように変形して半ば真繻になることが説明できます。枝替わりで紅花や白花が絞り品種に出ると似ています。花色の絞りは一度どちらかに枝替わりしてしまうとなかなかもとの絞り花に戻りにくいのですが、この不稔の真繻キメラは不安定な場合が多いようです。しばしば、全く正常花を出しやすい品種とほとんど真繻花しか見ることがない品種もあります。私の所にある品種では天倫寺月光や佐渡侘助は比較的に変わりやすく、一子侘助は、一輪しか正常花を見ていません。固定していたかはわかりませんが今思うと貴重な小苗だったかもしれません、つまらない花でしたから捨ててしまいました。長年にわたり沢山の苗木を育てていると、幾つかの品種に真繻の花を見ているのですが一年限りだけで、全く二度と見ることが無いのがほとんどです。

もちろんしばしば尋常花を付けることがあることや、また全く花粉を出す花を見ることが無い、絞り性のない品種であるかどうかは長年栽培してみて初めて分かることです。真繻

は枝替わり性と関連していて不安定である場合も多くあり、完全に真繆しか咲かない品種ばかりではないことが栽培しているとわかります。

葯毛の発生

不安定な形質を固定していないといいますが固定していて、安定して真繆の花しか見ない品種もあります。私は友人から比較的早い時期に桜島月光^{がっこう}を貰いました。葯部^{やくぶ}が白い白蕊^{しろしべ}であったので桜島白姫という名前があったそうですが、白花と勘違いされやすいので、友人の所に入る時に、卜伴の花のようだというので（京都のあるお寺での卜伴の別名（月光）にちなんで改名されたと聞いています。おそらく、東京に入ったのはこの時が初めてと思われる。初めての珍しい品種であったので詳しく観察していました。桜島月光が最も固定している真繆品種の一つであるとみています。（いつも長蕊形で安定していて、全く花粉のある花は咲いたことはありません。）そうするとこの白蕊に毛が生えているのに気がつきました。赤い花糸の先の白い葯部にルーペで見なければ見えないような小さな毛が生えています。花粉嚢ではなく支持部（葯托^{やくたく}）にチョロチョロと毛が見えます。そこで、ほかの品種も調べてみました。以前から持っていた天倫寺月光にも生えることがあるのにも気が付きました。同じように友人からもらった吉備にもたくさん生えています。私の作出花の妙蓮寺侘助にも時々この葯毛が生える雄蕊が混じることがわかると、面白いことだと思って、手当たり次第に色々な侘助咲き品種を調べてみました。そうすると多くの真繆品種でまれには葯毛をもつ蕊を付けることが確認できました。子房に毛のある吉備や、太郎冠者の実生ではないかと考えられている品種に約毛があるのでから太郎冠者にも当然あってしかるべしと思いきなり沢山の花を調べました。しかし、太郎冠者の花には見つかりません。花粉が出てしまうと見にくいので、蕾を摘んでは無理に開いて調べてみました。真繆に咲く花も、花粉を持って咲く花も、早く咲く花も遅く咲く花も見ましたがありません。もしかすると山椿がこの形質を持っているのかしらとも思いました。

約毛の観察

葯の毛についての報告を調べてみるとすでに、「京都園芸」の椿特集号の記事で、研究者は下総侘助の所で、「…葯に毛のある個体はまれで、太郎冠者の実生と伊予侘芯（蕊）の2品種にしか発見されていない。」と述べて約の毛が、3品種以外の他の品種には見られないとしています。侘助椿を集めているというある方にこのような話をすると、太郎冠者自体にも約毛が生える事があるという報告があるということでした。（未確認）やがて、私の所にある苗木の1本に生えるものを見つけることができました。（写真参照）



太郎冠者の雄蕊群の一部 変形して不完全な花粉囊がある。上部ピントの合っている雄蕊の葯に毛がはえているのが写っている。(anther-hairs on stamens)

この木は1 mほどの小木ですが、年々葯の毛は少なくなっているように観察されます。半ば真繻の様な花の変形葯にのみ毛は現れるようです。初めて見つけたときはこの木のほとんどすべての花のどの雄蕊にも毛が生えているようでしたが、年々毛は少なくなってくようです。同じくらいの大きさの苗木はいくつもありますが葯毛が見られる木は一本しか確認できていません。

天倫寺月光は時に生える事があるという感じです。多くの雄蕊の中に幾つか葯毛をもつものが混ざります。一つの花のどの雄蕊にも生えるような花も見ています。3 mほどの高さの親木の花でも生えない花の方が当たり前です。蕾を剥いて調べていると花粉のある葯に毛が見当たりません。葯の不完全な花のみ毛が生える雄蕊が混ざる時がある様です。桜島月光は成木でも小苗でも必ず葯に毛を持つようですし、一部の雄蕊に生えるのではなくどの雄蕊にも葯毛があると思います。吉備もたくさん生えるときとない時があります。

さて、私は「カメラアレジスター」の時にこの編集を手伝っておられた、その当時日本ツバキ協会の理事であった篠田信治氏が、編集者であるトーマス サヴィジ氏を案内されて私の農園を訪れたことがありました。この時侘助の話が出て、「蕾のまま花が咲いてしまう様なものだ。」というようなことを言ったのをこの小文を書いていて思い出します。30

年以上前からこの様に、ごく小輪花について考えていたのです。「雄蕊や雌蕊が十分に発達していない蕾の状態なのに花が咲いてしまう」という考えは概ね正解であるようです。

真繆は葯の未成熟による花粉の欠損であることには間違いがないでしょう。しかし、説明がつかないことがあります。その一つが、先に示した雄蕊の花糸と葯の分化形成に関わる問題です。花糸からの分化が阻害されるのが真繆であるとする、白蕊が説明できません。椿の花糸は赤い色をしているものも多くあります、そのまま花糸が成長すれば赤い花糸と同化したものとなり、赤蕊となるはずですが、桜島月光の花糸は実際に赤く染まります。それなのに蕊はト伴のように白くなります。初めてのこの様な蕊をト伴のようだとして天倫寺月光と名付けた宮澤氏も「小さいト伴」と言っていたと聞いています。ト伴の蕊はペタロイド（花弁化したもの）とされていますが、赤い花で花糸も赤いのに何故か赤い花弁にならずに白薬です。ペタロイドとすると、ト伴の白蕊は特異なもので、このことは不思議に思っていますが、同じように桜島月光の赤い花糸と白い葯部は、単なる未分化では、説明できません。天倫寺月光については花糸は白いですから花糸からの分化が出来ていない状態だと考えれば白い葯部は、説明できます。しかし、この部分に毛が生えることは説明できません。日本の山椿などには、花糸や葯に毛が生えているということは無いように思います。

この葯部毛が唐子弁と関係性があるのが、小夜侘助（紅一休）です。この品種が小さな旗弁、赤いペタロイドを雄蕊群の中に交える花を付けるのを何度も見えています。この時この小花弁状に変化した葯部だけに必ず毛が生えます。ペタロイドを付けない真繆蕊に毛は見えていません。小夜侘助の場合何故か旗弁にのみ毛が生えます。何かペタロイドと関連性、関係性が考えられます。

姫侘助は唐子咲と関係がありそうです。葯部は匙形に広がり一種の唐子咲のように咲く花を見えています。数寄屋（var.albo-rosea）にもごくまれには唐子弁が出るのを見えています。

いずれにしろ、真繆と葯部の毛についてはどういう病理的なものなのかはわかりませんが関係があり、単純な発育不全ではないことは明らかです。ただ単に発育分化が途中で止まったままの状態であるとするのでは、毛が生えることが説明できないと言えます。つまり、発達不全だけでは説明できない何か違う毛の生えるような異なる組織に局部が変化しているのです。真繆の根本的な仕組みが単なる発育不良ではない可能性があると考えています。また、真繆の原理が発達抑制因子であるとしても、なぜ長蕊形のように花弁も含めた花全体が小さくなる場合と、短蕊形になるように相対的に花心部の方がより発達が遅れてゆく場合があるのかもその原因は分からないことです。

花糸毛のある椿属

花糸に毛の生えている毛蕊種について調べてみました。葯の毛と花糸の毛が関係があるかしらと思ったのです。分類学者は葯部の毛について記述していないようなので、私の栽培している椿属を見てみると、花糸に毛が生えている種が全て葯にも毛を生やすわけではないようです。多毛花糸のサリシフォリアは生えていません。しかし、この類のアッシミリス、ロンギカルパ、エリナ（ピリディカリックス？）は生えるのを見えています。山椿に近

い類は毛蕊紅山茶の中国名をもつ、メイレイは所持していないので見ていませんが、花糸毛を持つ種であるものは葯毛を持つものがあるようです。ポリヨドンタ（花糸有毛）はしばしば、生えるのを見ています。いずれも正常に花粉のある花です。

ピターディバーユンナニカと同定されている2個体に葯毛を見ています。ふつうは葯に毛はないのに時に半ば真繆状態で咲くときにだけ、葯毛を出すことのある個体があります。太郎冠者の生え方に似ています。オーストラリア経由で導入された1個体と昆明西山産の1個体に葯毛を確認しました。いずれも花糸に毛を持つ種です。

ピターディ（四川省産花糸有毛）やロンギコーダ（花糸有毛）とピターディバーアルバ（昆明植物研花糸無毛）は生えるのを見ていません。ピターディバーアルバは真繆で咲く花を見ていますがこの時でも葯に毛は出ませんでした。ただ1個体しか持っていないものも多いので、それぞれの種についてもっと多くの個体を調べてみる必要があります。

雌蕊、胚珠の異常

さて、私は雌蕊も雄蕊と共に繆くられたと言いました。この雌蕊しづいの不全について、牧野氏は「植物学雑誌」で、胚珠について、太郎冠者（Sukiya、var.rosea）や数寄屋（Hatsukari、var.albo-rosea）は not many（多くない）とありますが形態には触れていません。（英文は植物学雑誌による）小蝶侘助（forma bi-color）、紅侘助（var.campanulata）、桃色侘助（forma subvidua）では記述がありません。白侘助（var.wabiske）の胚珠についてだけ imperfect ovules と述べて不完全であるとしています。私の観察では胚珠が丸く見かけでは特に不稔なものかは推定しにくい場合もありました。しかし、どの6品種からも種子が得られにくいことは知られています。太郎冠者や数寄屋（初雁）は種子がとれるることがあり育てたことがあります。記述された他の4品種は実生がとれたことを確認していません。私の観察では程度の差こそあれ胚珠は白侘助と同じように変形や未発達、欠損があり雌性の不稔障害が理解できます。

小蝶侘助については、植物学雑誌の挿し絵には、花粉を持つ筒蕊から長く突き出た雌蕊が描かれていますが胚珠については記述が無いので調べてみました。短糸形から長糸形、ほぼ正常な筒蕊の花までいろいろな場合でも明らかに稔性がありそうな胚珠は見られませんでした。時には子房内の部屋が狭く胚珠が全く見えない場合もあります。開花時、通常子房の内部には空間があるのが種の子房ですが、これが見られないものもありました。

白侘助の子房内には落花時ですでに、この室内に3胚珠が太ったように詰まっているのを見ています。（偽結実？）しかし、多くの場合、空洞で何も無かったり、大きさも不揃いな凸凹にしなければならぬ胚珠しかありません。一般的には、丸く整形の胚珠を持つ品種でも極めて母系稔性が悪い場合もありますし、変形した胚珠しか普通は見えないような太郎冠者も時には結実することもあるので変形しているからといってその品種が全く母系不稔かどうかは断定できませんが、桃色侘助（=蕊無し侘助 津山）は室内が空洞で胚珠らしいものは何もなく、中軸部に小さな点があるだけでした。他の真繆咲の品種も子房を切り開いてみれば、ある程度は母系稔性について理解できる場合がありそうです。一休は大きな木になると種を付け、実生苗を育てることが出来ます。一休の子房を観察すると、花粉に

特に異常の無い花でも、3室に各3個の丸い胚珠があることもありますが、胚珠がなかったり、不定形に変形してしている場合もあり、明らかに雌性稔性が良くはないことは胚珠を見れば納得できます。つまり、発達不全は雌蕊の子房にも及んでいる場合もあると考えられますから、比喩的に言えば花心が繆らているのは、花の底の部分、めしべの付け根であることになります。

退化ということ

「ワビ芯」椿について、これが退化によるものと認定されていることにも問題があると思います。退化という言葉の数がすくないことや小型になることまた、消失することと同じ意味で用いるのはよくない場合があります。これらのことの原因についての判断が退化とできない場合があるからです。そこで、初めて植物学的な記述をされた牧野富太郎氏はどのように言っているか調べてみました。

似ている種の別種や変種と考えるならその対象の種から退化した形質があると考えなければならぬということもあるでしょう。子房外面多毛の唐椿 (*T. reticulata*) の変種として記述した牧野富太郎氏は白侘助の子房外面の少毛については、glabrous or nearly so from the degeneration of hairs と述べてはつきりと生物学的意味で退化によるとしています。雄蕊については欠損、不完全としかし言っていません。filaments deficient, anthers imperfect つまり退化と判断する要件ではないと考えていると思います。(英文は植物学雑誌)

子房の毛は種の存続のために必要で不可欠なものではないと考えることができます。進化の末に子房の毛を退化させていると想像できる山椿なども現実に繁栄しています。しかし、不稔はその生物にとって致命的ですからその意味でも退化ではありえないのです。母系不稔についても先に述べたように imperfect ovules と記述しているだけです。胚珠についても退化によるものではなく、その欠損、不完全は病理的なものだと思います。もしも、胚珠が退化したとすると、実を結ばないのですから、栄養繁殖(球根、地下茎、高子など)がなければその植物は存続できません。

それでもなおワビ芯が葯の退化であるとする場合、両性花である椿の花に考えられるのは雌花化しているとすることになります。(花卉の重複(八重)による雄蕊の減少、消失を退化とする場合も同様です。)性転換や雌雄異花や雌雄異株の場合です。雌花に特化して雄性機能を放棄するような進化は慥かに多くの植物にあります。これは、間違いなく雄蕊や葯部の退化といえるものです。この様な場合は雌花や雌株に雌性機能を集約させることが、その植物にとって繁殖力上有利であるからです。もちろん別花や別株に雄性花がなければなりません。

真繆椿は母系稔性を持つものもありますが、多くがむしろ種を結びにくいのはよく知られていると思います。太郎冠者などは小苗の時には真繆に咲きますがこの時、種が付きやすいとは思えませんし、大きな成木の時には花粉を良く出すのは、雄性木への性転換とは言えないでしょう。無性生殖機能を持たずに、雌雄両方の生殖器官が同時に退化すると考えることの説明がつかうのでしょうか？

雄蕊の数

真繆の小輪花について、雄蕊の数が正常に咲く花より数が少ないかどうかについても観察してみました。天倫寺月光の観察では、尋常に咲く花と真繆で咲く花とでは雄蕊の数がそれほど変わらないように思われます。また、咲き方が短糸形の時と、長糸形で咲く時とで小蝶侘助や白侘助でもおしべの数は特に変わらないようです。おそらく正常に発達して白侘助が花粉を持って咲くことがあるとすると、雄蕊は 100 本程度と想像できます。まれにごく短蕊形で咲くときでも 99 本の雄蕊がありました。一方で、大きく花糸の数を減らすことがある場合もあります。一休は時に真繆で咲くことがあると確認していますが、この時雄蕊の数も明らかに通常の花より少なくなっていました。私のメモによると、尋常花は 91 本、真繆花（キメラ状に変形した花粉嚢が混じる）は 50 本でした。最も雄蕊が少ないときは 16 本しかない花や花径 15 mm、花高 25 mm の凄く小さな花で咲くのも一休では見えています。雄蕊の数が蕾の成長途中で増えたり減ったりするとは思えないので、雄蕊の最も強い発達障害、雄蕊の消失減数は花芽形成時に起きる場合があるということになります。この他にも花粉を持つ花と真繆花を両方咲かせる品種には極端に雄蕊の数を減少させるものがあるのを確認しています。

蛇足ですが、雄性不稔、つまり、雄蕊の発達不全はいろいろな品種で（雑種でも）時に起こることがあります。特筆すべきは金魚葉の椿の雄蕊です。系統によるのか、しばしば葯を欠く雄蕊を付ける花が咲きます。面白いことにこの金魚葉系の椿の中には雄蕊を途中で二つに分岐するものがあります。このために、真繆の蕊も同じように二股に分かれたようになります。雄蕊の伸長発達の途中で成長点が二つに分岐（石化？）するよう見えます。この時雄蕊群に混ざる花粉嚢を欠く不稔蕊も分枝します。やはりキメラ状に不定形に葯を付ける雄蕊も混じります。不思議なことがたくさんあり、つばきの雄蕊の変化については興味がつきません。

研究者がわびすけつばきの類とするものとやまつばきの類とするものは「葯の退化」という間違った考えに支配されて分けられていて、しかも区別する視点が曖昧です。

wabiske の学名は元々は白侘助に与えられた変種名です。多形な椿たちをひとまとめにして、植物学的にこの学名を拡大解釈する前に、まず、白侘助（白花、子房外面少毛、室内有毛）がどういう植物かを原点に返って考えるべきです。太郎冠者（var.rosea 子房外面多毛、室内面無毛）が重要であるとすれば、太郎冠者がどういう椿なのか、その成立にいくつの椿属が関与しているのかさえ不明です。ゆきつばきの関与が全くないのか、ほかの何という種が関与して成立したのかなどがまだ何もはっきりとはわかっていないと思います。（私が注目している子房室内面の毛は侘助咲の品種のうちでは、一休（子房表面無毛）や吉備（子房表面少毛）、加賀侘助（子房表面多毛 花弁表面有毛）s についても生えるのを見えています。）研究者が指摘した葉柄の毛や子房の毛の生え方の違いについても、葯毛についてもどの種がどのようにかかわったか関わっていないかなどについて、はっきりと説明も

なく場合によっては無視されて侘助類が取扱われ論じられています。どれも無視されるような形態的特徴ではないと思います。

園芸文化的な視点に立っても、植物学的な立場からも、侘助蕊（ワビ蕊）は花粉を持たない蕊ではあり得ません。実際に初めの、元々の侘助、「小蝶」「侘助」は花粉を付ける椿であるのにそれが無視されています。生物学的な考えからも葯が退化したと考えることは理解出来ません。植物学的に色々な形質が複雑に絡み合っている一連の椿たちを簡単に、しかも意味のはっきりしない説明や言葉で二つに分けることは私には無理があるように思えます。園芸文化的な言葉を不用意に、植物分類学的に用いてしまったから問題が複雑になってしまいました。形態的な特徴についての植物学的な理解も不十分と言わざるを得ないような現状を認識すべきだと思います。

さて、この様に考えてみると真繆という言葉でいろいろな不稔にかかる形態的な特徴を説明できます。比喩的ではありますが、この言葉は非常に科学的で、植物学的にも優れた考え方であると理解できると思います。椿の花蕾の成長に対する観察や洞察力がなければ発想することができない言葉と言えるでしょう。その意味でしんくり（集合名詞）はわびすけ（集合名詞）と直接関係のない言葉とすることができます。現代の植物学的な考え方に当てはまる言葉であるので、雄性不稔の小輪花について考えるときに、園芸的にも伝統的な良い言葉であると考えてこの真繆を利用して私の考えを述べてみました。

「はつかり」（数寄屋）、「すきや」（太郎冠者）、「わびすけ」（白侘助）を石井勇義氏は園芸大辞典で「つばき」の変種として記述されました。つばき（japonica）中に見出されたものであるから暫定的にそうしたのだと思います。それぞれの侘助類品種の植物成立の原因については、石井氏が続けて述べているように、「細胞学遺伝子方面の研究を待つて断定」されるべきものであることは今も変わらないことだと思います。

江戸椿研究会 野口慎一